

事業の背景・目的

- 近年、石鎚山系におけるニホンジカの侵入・生息域拡大による自然植生被害が懸念されている。
- 当該地域は、三方向からの侵入経路があり、地理的に効率的な捕獲が困難な状況。
- 保護区域指定以降、植生等の調査情報は限られており、整備された資料がない。
- ニホンジカや生態系の問題についての認識が、有識者や一部の登山者にとどまっており、高標高域でもある中、保全活動につながりにくい。

自然植生への影響が軽微な
段階から、希少野生植物の
保全対策に取り組む

事業の内容

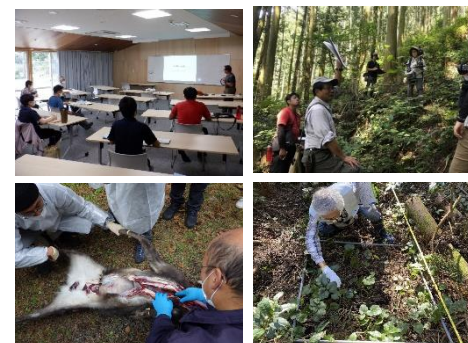
事業① 植生等調査事業

- ・ 希少種の多く生育する石鎚山系とニホンジカ被害が多いとされる東予東部地域の計16の地点において植生被害度調査を行った。
- ・ ニホンジカの侵入エリアの拡大を調査するため、令和元年度に引き続き石鎚山系西側でセンサーカメラによる調査を行った。調査箇所は3箇所から5箇所に増加した。
- ・ ニホンジカの分布拡大による植生への被害について経年変化を記録するため、調査地点4箇所を設定して、新たに定点撮影調査を行った。
- ・ 既設防鹿ネット内の植生のモニタリングを行った。



事業② 人材育成事業

- ・ 愛媛県内にはニホンジカの生態やその被害を評価できる人材が限られていることから、将来ニホンジカの調査に関わることができると人材を育成するため、専門人材育成講座を行った。
- ・ 講座は、植物調査に必要な群落調査法、群落断面図及び樹幹投影図の作成法の演習と、ニホンジカ調査に必要な糞塊及び糞粒調査法、胃内容物の食性分析のための解剖実習を行った。



得られた成果

- 植生被害度調査で得られたデータを基に被害度のランク分けを行ったところ、石鎚山系の高標高地における被害は、東部から西進し、すでに笹ヶ峰、寒風山、東黒森山まで拡大が確認された。
- センサーカメラ調査では、既設3箇所では撮影頻度が高いうえ、性比が見られないことから定着の状況が伺えた。新設2箇所では雄が多く確認されたため、現時点では定着の可能性は低いと考えられる。調査地点全域で、徐々にニホンジカが増えている可能性が高い。
- 防鹿ネットの新設はないが、既設ネットのモニタリングを継続し、被害の急拡大により即時設置が必要になった際の組織体制を維持する。
- 保全活動や情報収集を地域で継続して実施できるよう、協議会を中心により専門的な講座を実施し、人材育成を継続する。
- 高知県側（四国森林管理局、高知県庁、民間団体等）とも連携し、石鎚山系の生態系保全に取り組む。